

「六華和歌集」をめぐる

三 村 晃 功

中世和歌文学の中で私撰集の研究は、近時着々と進展しているが、まだまだ今後に開拓の余地を残している。

最近、井上宗雄・島津忠夫・稲田利徳の諸氏と共編で翻刻した「六華和歌集」（以後「六華集」と略称^①）も、いまだ紹介されたことのなかった私撰集である。とはいえ、「六華集」なる書名は、たとえば、一条兼良の「花鳥余情」には、「六華集に古歌とていせり。伊予の湯の湯桁の数は左八つ、右は九つ、中は十六、すべて三十三ありといへり。」（国文注釈全書本）と、「源氏物語」「空蟬」巻の「伊予の湯桁」の注解として見えているし、

又、築瀬一雄氏のご教示によると、広島大学文学部国文学研究室所蔵になる、藤原定家の「藤川百首」に関する注釈書「難題百首口伝書」には、「藤川百首」三二番の歌——「天河ふつきは名のみかさなれ^②と雲の衣やよそに

ぬるらん」（統群書類従本）の「雲の衣」に注して、

「六華集」に「山ふかくのがれすむとや月こよひくもの衣をかさねきぬらんの詞歟……」と見えているし、さらに、

日本古典全書本「山家集」（伊藤嘉夫氏校注）は、「西行和歌拾遺」として、「五月雨ははら野の沢に水みちていづく三河の沼の八つ橋」「山がつの折かけ垣のひまこえてとなりにも咲く夕がほの花」「露つつむ池のはちすのまくり葉にころもの玉を思ひしるかな」等の歌を、

「六華集」から収録した旨、頭注しているごとく、中世以降の文献にはいくつか探索でき、そこに「六華集」なる作品は、室町時代頃までにはいくらか流布して、歌人・古典学者等には案外利用されていたらしい事情が察せられる。

ところで、私は先年来、島原松平文庫・内閣文庫・蓬左文庫等に伝わる「六華集注」なる注釈書を調査しており、その結果はいくつか報告したが^③、実は、先引の「花鳥余情」に「六華集に古歌とていせり。」と記す内容も、「伊予の湯の湯桁は幾つ いさ知らずや 算へず教まず やれそよや なよや 君ぞ知るらうや」（日

本古典文学大系本」の雑誌催馬楽に注解されたもので、それは「六花集注」に載っている。従って、「花鳥余情」が「六花集」と記す作品は、正しくは「六花集注」と記されるべきであったが、一方、伊藤氏が「西行和歌拾遺」として、「六花集」から収録された和歌は、「六花集注」には見出されず、ために「六花集注」の成立には、その依拠した、いわば源泉となるべき作品の存在が予想されていたのであった。それが今度翻刻した「六花集」であったわけだが、はたして「六花集」には、伊藤氏の拾遺された西行の和歌が、多少の語句の異同は認められるが、所収されていた。その意味で、「六花集」の有する意義は大きく、その発見は井上氏らの手に成るが、「六花集」の報告はいまだ管見に入らないので、ここに新資料のこれまで検討した調査報告を行ない、大方のご叱正を賜わりたく思う次第である。

二

「六花集」の伝本は、現在のところ島原松平文庫の所蔵にかかる一本のみ。簡単に書誌的説明を加えると、当

書は、寛文・元禄期頃の書写になる。大本七卷二冊の写本。題簽は、「六華和歌集上(下)」、内題は「六華和歌集第一(二)四・七」・「六花和歌集五(六)」で、墨付き上巻九四丁、下巻九八丁、遊紙は上下巻とも、前後に各一丁ずつ有し、奥書の類はない。書式は、和歌を一行書きにし、その和歌の前に出典名(欠く場合もある)を、およそ二〜三字下げ、作者名を一二〜一四字下げて記す、一面一〇行書き。冬部と彌旅部に錯簡が認められ、重出歌が一四首、集付と作者名のみで和歌を欠落しているところが一箇所。所収歌数は、これらの箇所を訂正して集計すると、一九三四首で、春(三六四首)・夏(二六〇首)・秋(四二七首)・冬(二六九首)・恋(二二七首)・彌旅(一一五首)・雜上(三五首)・雜下(一二二首)・神祇(六三首)・釈教(四二首)の部立のもとに配列され、だいたいバランスのとれた歌数構成となっている。

三

「六花集」は上述のごとく、一九三四首の和歌から構

成された私撰集であるが、いかなる性格の私撰集であらうか。当集は、甚だ誤記がめだつただけれども、収録歌の出典と作者名を一応記しているので、それを参考に成立事情につき原及してみたい。

「六華集」の詞書は、「閏三月」「月山」「重陽哥」「花月」「寄名月恋」「鶯声和琴」「滝青混笛」「池水半氷」などのごとき、歌題を明記した例と、「賀茂御哥」「加茂より日吉への御哥」「住吉御哥」「貴布弥御哥」等の「」とき、「神祇部」の神に関する注記をした例を除外した以外は、すべて所収歌の出典を明記した、いわゆる集付の指摘である。すなわち、「古哥」「集不」など一般名及び出典不明を除く、「万」「催馬楽」「雑芸」「伊勢物語」「古」「後撰」「六帖」(古今六帖)「拾」「源氏」「後拾」「狭衣」「堀河」「金」「散木」「詞花」「山家」「千」「六百番」「新古」「拾愚」「新勅」「新六」「玉吟」「仙洞百首」「万代」「明玉」「現六」「唐物語」「統後」(統後撰)「統古」「統拾」「玉」「統千」「統後拾」「風」「新千」「新拾」「新後拾」がそれであって、「六華集」を編するに当って

素材とした資料は、勅撰集を初め、私歌集、私撰集、和歌行事、物語、説話等に及んでいる事情が察せられる。そこで以上の集付を参考にして、「六華集」に収録された和歌の出典分類表を作成すれば(勿論出典不詳歌を除く)、およそ次の通りである。なお○印を付した作品は、「六華集」の編者が集付として指摘している作品である。

出典資料	首数	曾丹集	七首
日本書紀	一首	兼盛集	一首
○万葉集	一〇三首	伊勢集	一首
○催馬楽	一首	赤人集	一首
寛平御時后宮歌合	二首	○拾遺集	三八首
○伊勢物語	一首	○源氏物語	一二首
○古今集	一七首	兼澄集	一首
躬恒集	一首	長能集	一首
貫之集	一首	○後拾遺集	三二首
○後撰集	三二首	○狭衣物語	二首
頼基集	一首	高陽院七番歌合	一首
○古今六帖	一八首	○堀河百首	六首

六条修理大夫集	一首	○新古今集	一三二首
○金葉集	二二一首	最勝四天王院障子和歌	一首
○散木奇歌集	二首	金槐集	一首
丹後守為忠朝臣家百首	一首	建保四年百番歌合	一首
○詞花集	一一首	平家物語	一首
和歌一字抄	一首	伊勢記	一首
今鏡	一首	○拾遺愚草	八五首
清輔朝臣集	二首	為家卿千首	三首
頼政卿集	一首	○新勅撰集	三九首
長秋詠藻	四首	洞院撰政家百首	一首
林葉集	一首	順徳院御百首	二首
○山家集	二二二首	○玉吟集	七一首
○千載集	五九首	○新撰六帖	八八首
御裳濯河歌合	一首	○万代集	一四首
○六百番歌合	一四首	○統後撰集	四四首
老若五十首歌合	一首	雲葉集	一首
千五百番歌合	八首	○唐物語	一首
秋篠月清集	六四首	三百首和歌	七首
和泉式部集	一首	弘長百首	一首

三十六人大歌合	四首	○風雅集	一一首
○統古今集	九六首	○新千載集	三六首
○統拾遺集	四二首	草庵集	一首
新後撰集	九首	井蛙抄	一首
○玉葉集	一〇〇首	○新拾遺集	二九首
○統千載集	七首	詞林采葉抄	二首
夫木抄	二二五首	○新後拾遺集	五首
仲正集	一首	落書露頭	一首
拾玉集	二二首		

(表 1)

この結果、「六華集」は、勅撰集では、「新古今集」「続古今集」「玉葉集」等から、私歌集では、「拾遺愚草」「玉吟集」「秋篠月清集」等から、私撰集では、「新撰六帖」「万代集」等から、その他では「万葉集」から多数の和歌を収録している事実が判明するが、その辺の事情をさらに明確にするために、「六華集」所収歌の主要作者の歌数を次に列挙してみよう。

家隆¹⁵¹(33)、定家¹⁴⁵(9)、良経⁹⁹(5)、俊順⁶⁸(17)、基家⁶¹(80)、

為家 56 (6)、西行 51 (5)、信実 39 (5)、宗尊親王 38 (4)、慈鎮 36 (1)、俊成 34 (3)、光俊 33 (7)、家良 27 (5)、寂蓮 25 (1)、知家 25 (5)、仲正 22 (6)、為相 19 (8)、家持 18、好忠 17 (7)、順德院 16、伏見院 14 (5)、貫之、後鳥羽院 13 (1)、顯昭 13 (2)、匡房、基俊 12 (1)、実氏 10 (1)、為兼 10 (4)、公親 9、実定、後嵯峨院 9 (1)、仲実、俊恵、道家 8 (1)、躬恒、兼昌、清輔、土御門院 7、能因、和泉式部、頼政、長明、実朝 7 (1)、公朝 7 (3)、宮内卿 6、季能 6 (1)、為世 6 (2)、顯仲 6 (3)、道因、式子内親王、雅經 5、崇徳院、行家 5 (1)、宣時 5 (4)、憶良、伊勢、輔相、小侍從、二条院、讃岐、家長 4、業平、是則、公雄、為定 4 (1)、赤人、為守、為実 4 (2)、頼阿 4 (3)、意吉麻呂、惠慶、元輔、国基、国信、待賢門院堀河、郁芳門院安芸、公継、守覚法親王、泰時、公経、成茂、教実、安嘉門院四條、京極前関白家肥後、景綱 3、隆房、隆升、国冬 3 (1)、忠通、兼澄、為秀 3 (2)、斉時 (3)、穂積皇子、閑院、忠峯、村上天皇、信明、順、輔親、頼実、定頼、良暹、弁乳母、経信、貞文、輔弘、公実、顯季、季通、慶算、師時、教長、登蓮、実家、具親、八条院高倉、加陽

門院越前、通光、通親、宜秋門院丹後、頼氏、藻壁門院少將、政村、実経、為氏、国助、盛久、実兼、為藤、為子、実重、盛徳、後醍醐天皇、良基 2、小町、頼基、大式三位、資隆、有家、源恵、能清、顯資、国道 2 (1)、円位、貞時 (2)、允恭天皇、真人、広瀬王、長皇子、久米彈師、紀郎女、百代、舍人娘子、広河女、旅人、有間皇子、若麻統部諸人家人、額田王、春日野藏首老、志加磨、小野老、益人、笠女郎、恵行、千文、行基、高田女王、今城、蟬丸、高津内親王、兼芸、素性、千里、言直、當時、中興女、宇多天皇、定方、元良親王、敦忠、等、増基、庶明、元真、後生、駿河、仲文、円松、惟成、兼盛、能宣、円融院、道綱母、実方、峯雄、千包女、常、重之、教時、実因、観教、季綱女、法円、公誠、源信、道命、伊勢大輔、為政、選子内親王、公任、永源、実仲、相模、宮木、上総乳母、国守、正家、師賢、顯房、祿子内親王、道経、康資、王母、堀河院、隆源、輔仁親王、孝善、兼久、桜井尼、小大進、白河女御越中、前斎院肥後、行尊、為忠、親房、祐盛、雅定、親隆、二条皇太后宮肥後、待賢門

院安芸・殷富門院大輔・前斎院河内・永範・公通・重
家・仲綱・経正・静蓮・範永・新肥前・戸々・盛雅・
重保・長方・頼朝・忠経・康頼・保季・教盛母・良平
・良平女・上東門院小少將・資宗・隆信・兼実・信定
・源空・範光・教家・季経・忠信・忠良・実房・時村
・定経・高弁・兼直・通氏・如願・光行・兼朝・師員
・隆祐・伊忠・真如・後鳥羽院下野・雅具・蓮生・今
出河院近衛・実伊・定為・行遍・為繼・後深草院少將
内侍・公相・基政・基平・資季・式乾門院御匣・実雄
・行氏・通成・長時・公誉・延季・円勇・国平・良教
・龜山院・鹿政・道玄・内実・後二条院・実時・政連
・淑氏・基忠・秀行・清行・後宇多院・長辨・親子・
為守女・頼信・邦長・説房・寂真・喜多院入道二品親
王・暹知・永福門院内侍・公脩・永福門院・和氏・経
有・実教・雅孝・広秀・国夏・宗恵・成国・光厳院・
経顯・良守・深養父・時文女・高光・匡衡・永成・
教家・盛範・実重・実平・盛方・顯家・為季・兼寛・
範玄・三宮・基輔・良尋・忠良・行念・親行・素暹・
重時・道良・具房女・宗秀・西円・茂重・時元・宗宣

・長清女・為想女・貞資・鷹司院・淨弁(1)

以上から「六華集」は、万葉時代から南北朝期頃に至る間の歌壇史に関係した主要人物の和歌のほとんどを収録している事情が判明する。その中でも、特に万葉歌を多数採っている点が第一の特徴であり、次に九条家の良経の下に、御子左家の歌人と六条家の歌人たちが勢揃いした、いわゆる良経中心の歌壇から、後鳥羽院中心の歌壇へと移行していった、いわゆる新古今時代前後の歌人の和歌を圧倒的多数採っている点が第二の特徴であり、そして、御子左派と反御子左派の歌人たちが対立していた頃に活躍した歌人の歌を、新古今時代前後の歌人の次に多く採っている点が第三の特徴である。そうして、建治元年為家没後、御子左家が二条・京極・冷泉の三家に分裂した以降では、二条家系統の歌人もかなり所収されているには相違ないが、京極・冷泉派の為兼・伏見院・為相の歌数の方が目立つ。この傾向は、たとえば「六華集」所収歌の最も新しい和歌はおよそ「新拾遺集」あたりだが、その二九首の所収歌にも窺われる。すなわち、「新拾遺集」に出典をもつ二九首の和歌のほとんどは過

去の歌人たちの詠歌であって、「新拾遺集」成立当時の生存歌人はわずかに良基（二首）・光厳院・為秀（各一首）のみで、次いで成立当時に近い歌人を示せば、為相・為藤・後醍醐天皇（各一首）の如くである。二条派の勅撰集で、「当時の歌人で歌数の多いものをあげると、後光厳院一六首、義詮一四首、為明一首、頼阿九首」（和歌文学大辞典）という状況のもとで、光厳院・為秀・為相らの歌人が採られていることは、「六華集」の編者が冷泉家系統の人物であるとは確言できぬにしても、親冷泉派的態度を有していたことの証拠となる。それは第一の特徴としてあげた、万葉歌の多い点とも関連して言えるのではあるまいか。

四

ところで室町中期頃成立の私撰集「雲玉和歌抄」（納叟馴窓撰）の序文には、

近曾万葉由阿みとて詞林採要をかき、六花をあつめて定家為家のあとをけかせしかともその詠哥とて一首もみえず書あつめたるものみな本文也（古典文庫本）

なる記事をその一部に載せており、夙に島津忠夫氏が、「六花をあつめて」というのは島原松平文庫・蓬左文庫等に伝わる「六花集抄」のことで、その撰者は由阿ではないかと指摘され、私も考察を試みたのであったが、結論としては否定的側面の方が強かった。となれば、「雲玉和歌抄」の右の記事は、「六華集」に「そ（由阿）の詠哥とて一首もみえ」ぬことが事実であり、又定家、為家以降の歌壇史に関係した歌人の歌が多かったことも前節で確認したところであるから、「六華集」の編者に由阿を想定してみる可能性を示唆し、事実、その可能性が強いのではあるまいか。

そこで「六華集」成立の素材となった資料はというに、前記の通り、勅撰集、私歌集、私撰集、和歌行事、物語、説話等に及んでいる。そうして「六華集」の編者の記した最も新しい出典資料は（表一）から明白なように、「新後拾遺集」であるから、「六華集」の成立年代は、一応、「新後拾遺集」の実質上の成立年代、至徳元年（一三八四）以降ということになろう。ところで、「六華集」所収の「新後拾遺集」に見える歌は、

- (1) 足引の山桜戸の春風にをしあけかたは花の香そする
(道家・一七二)
- (2) 一枝もおしてかへれば故郷に花見ぬものと人や思はむ
(為世・一九九)
- (3) 昨日までよもきにとちし柴の戸を野分にはるゝ岡のへの里
(良経・六四〇)
- (4) 嵐吹と山の岑のときは木に雪け時雨てかゝる村雲
(為家・一〇二六)
- (5) ふりつもる上葉の雪の夕凝にこほりてかゝる櫛の下つゆ
(行家・一三〇八)
- の五首で、「六華集」の編者はいずれの歌にも集付を記しておらず、「六華集」の編者が「新後拾」と明記している歌は、実は、
- (6) 大原やをしほの桜咲にけり神代の松にかゝる白雲
(為実・一五〇)
- (7) 行月の下やすからぬうき雲のあたりの空は猶時雨つづ
(公雄・九七〇)
- (8) にほ鳥のおろのはつおにあらね共鏡の山のかけに
なくなり
(為藤・一三四八)

の三首であって、(6)は「統千載集」、(7)・(8)は「新拾遺集」に見える歌で、いずれも「六華集」の編者の誤記である。(1)・(5)は「六華集」の編者が「新後拾」の集付を記していないわけだから問題にするに及ばないけれども、当集に「新後拾」の集付が見えるので挙げたが、実際、(2)は「嘉元百首」、(3)は「秋篠月清集」、(4)は「雲葉集」「夫木抄」「三十六人大歌合」、(5)は「弘長元年百首」に各々見え、(1)のみが目下のところ「新後拾遺集」にしか出典を探し得ない。しかし(1)も恐らく「新後拾」以外から「六華集」は収録したのであるから、問題は、何故「六華集」の編者が(6)(7)(8)の出典を誤記したかであって、その辺の事情は明確にし得ないけれども、かりに「新拾遺集」が「六華集」の最も新しい出典となれば、「六華集」の成立年代は「新拾遺集」の成立年代、貞治五年(一一三六)以降ということになるが、しかし「六華集」の編者の明記(誤記ではあるが)した出典を重視すれば、前述の成立年代になろうということである。もっとも、(表一)によると、「六華集」の編者が明記したのではないが、「落書露頭」に見える歌を「六華

集」が収録している問題が残されている。それは「落書露頭」に、「師直が家人薬師寺と云ひしもの」が「師直うたれて二三年後に」詠んだ歌として載っている、「月はみむ月には見えじとぞ思ふうき世にめぐる影も恥し」(以上、日本歌学大系本)の歌で、「六華集」は作者を「中納言広明」と記している。この歌の作者の決定はともかく、もし広明が公明の誤りであったとすれば、彼は建武三年(一三三六)没であるし、また薬師寺となれば、高師直の没年は観応二年(一三五一)であるから、当該歌の詠歌年代はそれより二三年後ということになる。ということとは、作者がいずれにせよ、「落書露頭」に見える「六華集」所収歌は、「新拾遺集」や「新後拾遺集」よりも以前の成立であるから、「六華集」の編者が「落書露頭」以外で、「新拾遺集」以前の作品から採ったと考えれば、この問題は解決する。そこで話を編者の問題にもどすと、当面の由阿の生没年代は未詳であるが、「京大本『詞林采葉抄』」の奥書「貞治五年十一月廿五日楡柳栄迎藤沢山隠保桑門由阿春秋七」とあるのに従うならば、逆算して正応四(一二九十六)の生れとなり、「関白」一条良基の懇望により万葉集を講ずべく上洛したのが貞治五(一三六六)五のことで、「

「更に応安七(一三二一)、八四才で『青葉丹花抄』一冊を成し」(和歌文学大辞典)ている事実から、「六華集」の成立を「新拾遺集」成立頃と見れば、正に相応するし、また「新後拾遺集」の成立頃と見るならば、由阿九四才頃の著作となつて、無理な感じがしないでもない。

けれども、由阿の歌壇史的評価は、二条派に対してはかなり批判的であるのに、冷泉派に対してはかなり好意的である点、良基の命を受けた為秀の依頼で上洛して良基邸で万葉集の講義をし、万葉集の注釈書を成している点などであるが、これらの特色は、まさに「六華集」の有所る特徴と軌を一にしている。すなわち、「六華集」の、和歌師範家の三分裂後に見られる歌人所收態度は、まさしく親冷泉派であるし、特に「六華集」における「新拾遺集」出典歌の中の良基・為秀らの占める位置は、為秀を介しての由阿上洛、良基邸での万葉講義の経緯から最もよく理解されるし、また「六華集」における万葉歌の圧倒的多数の収録、実朝・宗尊親王・泰時・光行・親行・素遇・隆祐・隆弁・齊時・宣時・貞時らの鎌倉歌壇に關係した歌人の歌をかなり収録している点など、由阿

編者説を裏付けるのではあるまいか。その他、「六華集」には「詞林采葉抄」から収録したに相違ない歌の見える点、由阿の使用した「万葉集」のテキストは仙覚本であるが、その仙覚の歌も採っている点などが指摘され、これらは由阿説を決定づけるほどの証左にはならないが、しかし、おおむね「雲玉和歌抄」の序文の説は信憑性を有するように思われる。

五

最後に「六華集」と「六花集注」との関係に触れて、この小稿を終わりたいと思う。

まず「六花集注」の伝本は、現在かなり伝わっており、およそ一四本を数えるが、今それらを総合して要約すると、「六花集注」はおよそ五三〇首の歌を載せ、それらの歌には、かなり詳細な注解が付けられ（欠く場合もある）、春部・夏部・秋部・冬部・見聞雑・旅部・名所部・祝言部・神祇部・釈教部・私尋記神祇部・雑下部・長歌・恋部の部立のもとに配列されている。そして、「六花集注」所収歌の出典は「六華集」とほぼ同様で、「詞林采葉抄」が最も新しい出典であるが、次に収録歌数の

多い出典資料を記すと、

万葉集¹²³、夫木抄⁸⁶、拾遺集²²、続古今集¹⁸、新古今集¹⁶、玉葉集¹³、拾遺愚草¹²、古今六帖¹¹、古今集¹⁰、後撰集・後拾遺集・千載集⁷、源氏物語・玉吟集⁶、金葉集・千五百番歌合・続拾遺集⁵、

という状況である。また主要作者の歌数も、

定家¹⁶、俊賴・良経¹⁰、家隆・光俊⁹、仲正・俊成・家良・為家・基家⁶、信実⁵、西行・宗尊親王⁴、知家・後醍醐天皇³、実朝・家良・順徳院・実氏²

という具合であって、およそ「六華集」と同傾向が窺われる。

ところが、これを「六華集」と比較すると、そこにはいくつかの顕著な相違点が指摘される。その第一は、「六花集注」の有する名所部・祝言部・私尋記神祇部・長歌の部立が「六華集」には存在しない点、第二は、「六花集注」には長歌を含めて万葉歌が圧倒的に多い点、第三は、「六華集」の所収しない歌を「六花集注」が約九五首も収録して、それに歌注を付している点である。

この第三の相違点は、現在「六花集」の伝本は島原松平

本しか存在しない故、あるいは「六華集」の完本には

「六花集注」の有する歌すべてが所収されていたのかも知れないけれども、しかし歌数などの点からいって、「六花集注」から「六華集」が成立した過程はとうてい考えられず、やはり「六華集」の中から難解な和歌を抄出して、それに注解を付している過程で、「六華集」には見えぬけれども、関連性のある歌を補充、それにも歌注を付して成立したのが「六花集注」ということになる。

従って「六華集」の編者と「六花集注」の編者は同一人物ではなく、前者は由阿の可能性が強く、後者は既に指摘したが、冷泉家系統の連歌師の誰かではなからうか。

なお、「六華集」には、未発掘の歌が多く、特に家隆・基家の詠歌には新出歌がかなり指摘され、その意味で、「六華集」は資料的価値も高い私撰集であると認められよう。

△注▽

1、古典文庫から昭和四十七年八月刊行。

2、「岡山大学所蔵『六花抄』について」(『国語国文』

昭44・8、四二〇号)、『六花集の研究』(私家刊、昭45・8刊)、『六花集』の性格と価値」

(『国語国文』昭46・9、四四五号)など。

3、『六華和歌集』(古典文庫)の凡例で具体的に指摘した。

4、断っておかねばならぬことは、「夫木抄」所収歌は、原資料の判明する歌も、すべて「夫木抄」に入れた点である。

5、数字を説明すると、()内の数字は、「六華集」の編者はその作者の詠歌と明記しているが、実際はそのことを確認できてないことを示す。たとえば、家隆151③は、三三首の歌は現在未確認の歌で、一一八首は確実に家隆の歌と認められる歌。しかし「六華集」の編者の見解を重視して、一五一首が家隆の詠歌であることを示す。なお、「六華集」所収歌は、資麿(一〇三五番)・高成(一一九六番)・景冬(一六三九番)・時長(一七五二番)・語成(一八五九番)の作者の動向が不詳である以外は、すべて良基より以前の歌人の歌である。

6、「和歌と説話と——雲玉和歌抄をめぐる」(『国語国文』第三七卷第三号)

7、注2の「岡山大学所蔵『六花抄』について」

8、井上宗雄氏『中世歌壇史の研究 南北朝期』六三〇頁参照。

9、小島憲之氏「由阿・良基とその著書——中世万葉学の一面——」(『万葉集大成』2)参照。

10、彰考館文庫(三本)・内閣文庫(二本)・陽明文庫

(二本)・竜門文庫・蓬左文庫・東大寺図書館・島

原松平文庫・岡山大学図書館・愛知教育大学・穂久

邇文庫(各一本)に所蔵されている。

11、注2の「『六花集』の性格と価値」

〔付記〕本稿は、昭和四十六年度文部省科学研究費補助金(奨励研究(B))による研究成果の一部である。

——岡山県立津山高校教諭

——本学第十一回卒業——